

あを

6

2019



梅雨晴や食ふ枝豆はバルコニー  
梅雨の入りグッド・バイの川氾濫す  
梅雨の床屋の耳学問聞きをり  
奥能登の梅雨の舟小屋ランプ吊る  
奥能登の梅雨の舟小屋とびとびに



絵と俳句・関合正昭

# あざ

六月



須賀忠男

山と川

東京 佐藤 喜孝

あひたくて朝寝してゐるもう出ない  
老櫻けむりのやうな幹で立つ  
よろこびのきはみのおたまじゃくしかな  
たらちねの鯨は抱くこと断念  
野遊びや漢字のやうな山と川  
ひとしとは似てしなるものひおしがり  
玉蟲の千年前のたまむし色



東京 七郎衛門吉保

平成

平成も引き出しに入れ四月尽  
春鬪の鬪を忘れて平成尽  
平成尽友も旅立つ別れ霜  
春筍や新紙幣の顔に息吹  
兄見舞ふ道に重たき夕霞

東京 篠田 純子

蠟紙

新元号の号外やぶれ万愚節  
蠟紙に鉄筆花の句会報  
缶ピースほぐし蛙の目借り時  
井の頭たふたふたと花筏  
花筏一直線に鳥よぎる

石川 定梶じょう

うまごやし

思ひ出せさう思ひ出せさう木の芽立ち  
雷神も照覧金の春満月  
けつまづきさうな浮雲うららけし  
葱の花落第坊がいとほしむ  
置かれたる土管持て上ぐうまごやし

東京 須賀 敏子

四月尽

「道新」に包まれ届くアスパラガス  
目借時カタコトカタとファックス機  
春北風足利市大小山だいししょうやまの岩場かな  
ジグザクや三ツ岩岳のひとつばな  
飽きもせず今日も浅蜷の御御御付



東京 田中 藤穂

清瀬吟行

武藏野の面影たぐる春のバス  
花の雲波郷の清瀬川流る  
春の河原五平餅売しづかなり  
帰りには九分咲きなりし桜かな  
鴉二羽桜を散らす遊びせり

三重 長崎 桂子

蚕豆

蚕豆のはしりの食卓祖父母思ふ  
露味噌の送られて来し盛上がる  
小動物蠢く如き春の雲  
風誘ふ二片三片散る桜  
花吹雪踏締め行交ふスニーカー

東京 森 なほ子

ゆるゆると

花屑の中より伸びて名草の芽  
春昼やちり紙交換ゆるゆると  
青空をくまなく花の隙間かな  
翳り来て寂しくなりぬ春の土手  
さへづりや仏一体修復中

東京 赤座 典子

恵比寿ガーデンプレイス

子と遊ぶヒジャブ姿の春景色  
春昼やスーツの行列ベーカー  
映画見て余韻のベンチうららし  
春秋の欠片も見えぬ別世界  
写真展「戦火の記憶」冴返る



埼玉

秋川 泉

花見

薬のその幹にあるあたたかさ  
ひととせの現の花や平成に  
五平餅旨しと花見そこそこに  
花舞ひて芳紀十八猫の跳ぶ  
花吹雪繰る手が止る紙芝居

埼玉

大日向幸江

春星

鴨一羽浮かべたゆたふ春の水  
真つ赤なトラクター跡継の田起こしす  
だらだらと吹く春風や寺詣  
場所取りのまだ誰も居ず花の下  
顔を見せぬ富士の辺りに春の虹

哲学堂 一句

佐藤 恭子

孔子の顔カントの声や蟬の鳴く  
一茶と寝木枯とも寝夜長かな  
夏草の中の一輪すみれ草  
春の空カラス雀も番かな  
臍の露に濡れてるゐないよな



拭きこみし漆のうへに牡丹雪 佐藤喜孝

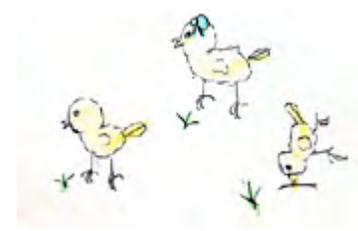
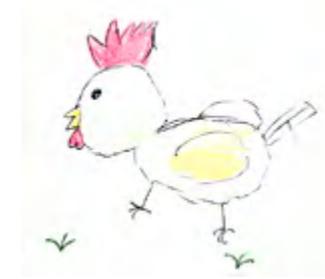
入園す小犬のワルツ踊るごと 大日向幸江

沿ふ川を半襟にして花の帯 七郎衛門吉保

撫牛は耳も尾も溶け百千鳥 篠田純子

焼跡の土間のさびしら春の雪 定梶じょう

折鶴の角きつちりと卒園す 須賀敏子



角貝も土産に加へ春の島 田中藤穂

お喋りと笑ふ少女等スイトピー 長崎桂子

紙箱のしつとり重く桜餅 森なほ子

春の雨をはらはぬうちの薄日差 赤座典子

日脚伸ぶ各駅停車のひとり旅 秋川 泉

たまさかとまさかのあはひ花の闇 佐藤恭子



かるいなぬぺんぺん草の白い花

佐藤 喜孝

俳句を始めた効用に、日本語や漢字の面白さを知ることが出来る、がある。一本の草を見て「実が三味線の撥に似た形、その擬音を連想してぺんぺん草」に、同時に「夏になると枯れるので夏無、あるいは撫でたいほど可愛い花から撫菜」から薺と名付けるユーモアと風流の二面性。作者はこの二面性を承知した上で、揺れる様を「かるいなぬ」とし、諧謔味を楽しんでいるようだ。(吉保)

積みて崩す十七文字春闌

佐藤 喜孝

十七文字を考えている時に、積み木を積んだり崩したりするように、言葉を足したり、入れ替えたりします。下五の「たけなわ」の意味は、真つ盛りと、少し盛りを過ぎたさま、と両方ありました。作者は、どちらの春の景色を感じていたのでしょうか？どちらかに決めつけるというものでは無いのでしょうか。微妙なニュアンスが分かりませんでした。(典子)

つくしんぼ土手もぼちぼち目覚め出し

石森 理和

何も無い土だけの土手に、緑色がちらほらと見え始める。そして、丈の低いつくしが、あつという間に生え広がる。つくしの生え初めを、土手も目覚め始めたという表現。ぼちぼちが効いています。春のこれからを楽しみにしている感じが伝わってきます。(典子)

杉折に土筆和へ入れ農繁期

大日向幸江

初夏を迎える頃になると、新潟県越後湯沢町の友人から山菜が送られてくる。今年の一便では「木の芽・タラの芽・こごみ」が届いた。第二便は「曲がり竹・山ウド」かと期待している。作者は土筆の和えものを、杉折に入れているので料理の匂いがする。タツパウエアーでは一気に味気なくなる。そして農繁期、料理を囲む人たちの顔が見えてくる。山里の豊潤な恵みと一緒に。(吉保)

アルパカのごとふつくらと寒の梅

七郎衛門吉保

「如し、如く、如」などほかの物に譬へる詩法は洋の東西にある。単純なやうに見えるが捨てがたいものである。この句は形状が似てゐることに興味を持たれた。素直な嫌みのない句である。注意点がある。如くで繋いだら「どこがどのやうに」といふ説明は禁句。「アルパカのごとき寒の梅」とふつくらを省く。もうひとつ「寒の梅」は咲いてゐる花のこと。ふつくらとあるので苔のことではないかとも考へられる。推敲を進めると時に「金剛の露

ひとつぶや石の上」と「如く」を省略するに至る。如く俳句は奥が深い。

コンクリートの街に土の香春立てり 篠田 純子

清瀬に住む迄は、まさに、コンクリートの街に暮らしていました。家の前の歩道には、プラタナスの並木があり、その根元の周りだけに、土が見えていました。そんなに少しの土でも、春先は瑞々しく、プラタナスも芽吹きました。純子さんの句で、何十年前の光景が一気に蘇りました。何事も見逃さない純子さんのお蔭で、ほんの僅かだった土の香りも思い出しました。(典子)

少年に雄志あるべし風の空 定梶 じょう

札幌のクラーク先生の時代には、大きな志を持った少年が、多く存在していたことでしょう。今でもそうあつてほしいと願うのですが、なかなか難しそうです。そこで、じょうさんは、雄志あるべし(◎◎)、そして、大風のように空を上って行け!と、応援しているのですね。(典子)

桜桃の棒苗植ゑて夢すこし 須賀 敏子

作者は自宅の庭に、柿とか金柑など結実の期待できる木を植えられ、その経過とか変化とか成果などを、俳句の対象としても楽しんでいたので記憶している。桃栗三年柿八

年は分かるが桜桃は何年? ネット情報では結実年数は四〜五年とあった。来年はどんな句で表現されるのか、毎年その変化を詠まれたらどうだろうか。桜桃結実の夢を少しだけ見ながら。(吉保)

阿と云ひて吽のきこえぬ寒さかな 田中 藤穂

向田邦子作のTVドラマ「阿吽」を思い出す。四十年前の映像にもかかわらず、ドラマに登場した町の姿が鮮烈に甦る。昭和十年代の仕舞屋の様子と、作者が常々ご自宅の様子を述べられる景色とが重なって見える。そのご自宅での生活と人生は、達観の域に達したごとき振る舞われているのではと、勝手に忖度していたが、そんなことないようですね藤穂さん。(吉保)

シャツズボン竿に絡まる春の風 長崎 桂子

干されている洗濯物が、風に吹かれて絡まったり、翻ったりしている。パントマイムの人、ひらひらと舞う姿等、春ののどかな風が、面白がって、次々と形を作り出しているようで楽しい想像が色々湧いてくる句です。(典子)

揺れながら体積増すや石鹼玉 森 なほ子

我等の石鹼玉遊びは、綺麗な色と粘りの玉が出来るようにと、お茶や紫蘇の葉を混ぜるなどしながら、石鹼玉水を作ることから始まっていた。知恵と工夫を加えながらも玉の大きさは10cmを超えることはなかった。孫と遊ぶシャボン玉は百円シヨップで手に入れる。台所洗剤と洗濯糊などから合成された液は粘り強く、正しく揺れながら体積を増やし上空を行くシャボン玉となる。(吉保)

フレンチや雲丹を包める帆立貝 赤座 典子

素敵なお店で美味しい料理をいただく。その上、一句をものにできれば……贅沢な時を過ごされた。取り立てて表現に工夫の跡が見えぬのは長年俳句を倦まず作り続けてきたご褒美。「包める」が良い働きをしてゐる。(喜孝)

寒満月ぬぬっと出し橋の上 秋川 泉

先日のスーパームーンの出現の際、泉さんの電話で、慌てて東の空を見に上がりました。初めてオレンジ色の大きな月を、まじかに見ることが出来ました。何時間か後の月は、真っ白に澄み切っていて、それも又驚きでした。苦勞して「ぬぬっと」に、たどり着いた泉さんに、拍手と、御礼を申し上げます。(典子)



定樞じょう

の 三月号「あとがき」に、えいまちゃん(でした?)

ドアあけるあたりいちめんぎん世界

を喜孝さんがとり上げていらつしやる。

芭蕉の、三歳の童子にさせよ、を合点する出来栄  
えの句ですね。なまなかの俳人なら「ドアあけて」  
とするかもしれませんがいまちゃん句は上五で  
ポーズをとった。そして「ぎん世界」が季語たり得  
るか否か、ということ喜孝さんの仰有るとおり、ど  
んな歳時記にも掲載されていません。

数十年も前になります。加わっていた結杜誌に「銀世界」他の言葉がとり上げられて、同じように季語たり得るか否か、が議論されたのでした。当の俳誌がいま手もとに在りませんけれど、どういう手順を経てどんな結論に至ったか、はよく覚えていて、その記憶に従って少し調べなおしたのが以下に述べる文章なのです。

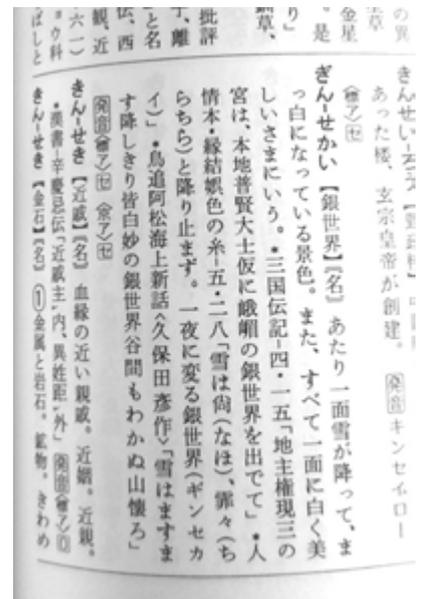
戦前に平凡社から出された『大辞典』という素っ気ない、ある意味その通りの名の国語辞典があります。専門家に言わせると、言葉だけをともかく集めに集めた辞典。七〇万を越える語数を収録する、日本一の国語辞典ではあるのですが如何せん、「言葉だけを集めに集めた」感が先立って、説明内容が深くない。しかし用例は実際にあったものを採っているわけで、これは十分に参酌するに足る。

で、その用例には〈陳泊の開元寺凌虚閣對雪詩「眼觀銀色三千界身到瑤臺十二層」〉がとり入れられています。開元寺は百科事典によると、唐代の官立寺

院。中国各地に現存しているそうで、日本の国分寺は開元寺の影響で天平期に建立された、とあります。高閣から雪に望んで詠んだ詩。「見たす限りの銀世界、身は開元寺のたまのうてなにあること十二層」。いつ頃の詩か分りかねますが、他の用例から推してそんなに古くない。大辞典の用例には他に、一七九六年の歌舞伎脚本『銀世界雪振袖』や同じく一八三八年のもの、歌舞伎小説と称する一八二八年のもの、など。また一番頼りになる『日本国語大辞典』は『三国伝記』という仏法を中心にした説話集から採っていて、この書は十五世紀前半ころの成立だそうですから「銀世界」の語は応仁の乱の時代には既にあつたことになります。私たちが今遣っている季語は多くが俳諧から連続している言葉。二十四節気などの中国伝来のことば以外は格段に和語が多い。「銀世界」は和製漢語であり結局、俳句の日本語になり得なかつた。

俳諧に取り入れられなかつたのには相応の理由が

あつた筈で、同じ漢音で読んでも例えば「余寒」などはいかにも寒そうな響き。和歌の題にも取り込まれているようですが、「銀世界」は詩歌に取り入れられることはなかつた。先述したとおり、和製漢語。そんなところに原因があるかもしれません。



(小学館・日本国語大辞典)

**銀世界**                      **大日向幸江**

銀世界とは便利な言葉だ。雪にでも月にでも直ぐ様使える。一年中銀世界の南極や北極では季語とは思いませんが、私達四季の有る国では、すぐにも冬の季語になりそうですね。

銀世界 雪景色の白く美しい形容。  
 陳泊の開元寺凌虚閣對雪詩「銀世界色三千界、身到瑤臺十二層」  
 白旗世界樹小説  
 歌舞伎脚本。四幕。二代中村重助作。天保九年十一月江戸市村座所演。平惟茂の紅葉袴を脚色した顔見世狂言。一谷敏軍記の三段目と常盤津の騒猿等を仕組んだもの。  
 銀種松行平 歌舞伎脚本。五幕。並木五藏・松井由穂作。寛政八年十一月江戸市村座所演。伊勢物語の世界に暫の香替・浮洲の岩・松風の所作等の趣向を入れた顔見世狂言。  
 西花岡銀世界雪振袖  
 一高橋銀世界雪振袖  
 合巻本。六冊。市川三升作(代作五柳亭徳升)。

(平凡社・大辞典)

- |                  |       |     |
|------------------|-------|-----|
| ゴスペルに銀世界なる曹爾芒    | 鈴木照子  | 瓊   |
| 厄払ひ終へし境内銀世界      | 山本節子  | 瓊   |
| 元日や浄めの白の銀世界      | 山口キミコ | 瓊   |
| 銀世界弾んで聞こゆ初電話     | 斉藤裕子  | あを  |
| 山茶花の散り所なき銀世界     | 早崎泰江  | あを  |
| 銀世界綱となりし雪眼鏡      | 稲畑廣太郎 | ホトギ |
| 新雪や田は芒洋の銀世界      | 荻野照   | 遠嶺  |
| 黒々と雪の降り来し銀世界     | 大東由美子 | 火星  |
| 銀世界手品の一手夜の雪      | 水谷直子  | 京鹿子 |
| お元日穢土の浄土や銀世界     | 三浦百合子 | 笹   |
| 冬柿を景色に添えし銀世界     | 浅井よしみ | 八千草 |
| 耳鳴りの他に音なし銀世界     | 菊谷潔   | 六花  |
| 四時起ききの祖母の告げ来る銀世界 | 田尻勝子  | 六花  |
| 青鰻やいま一面の銀世界      | 松下八重美 | 槐   |



佐藤喜孝

大日向幸江

春星の一つになれと野辺送り  
野すみれを猫のお墓の標とす  
山桜混雑避ける旧道に

◎今この句を読む直前、午前三時の月を眺めてみた。南の窓から月が去ったので西の窓から顔を出してさがした。薄く刷いた雲を蹴散らすかのやうに右側がすこし欠けた月。その右下に一つ星が光つてゐる。調べたら木星とのこと。草や木でもさうだが名前を知ると知らないのでは見え方が違ふ。逝かれた人を星になぞらへるのは誰でも一度は覚えのあることかも知れぬ。

◎前句の星になれと願ったのはこの猫かも知れぬ。「野のすみれ猫のお墓の標とす」。

◎自動車が渋滞を避け旧道にそれた。その旧道で山桜の遇はれた。印象的な桜であった事だらう。中七は事柄の説明に終始してしまった。

七郎衛門吉保

ブラックホールに飲ませてみたし花明り  
養花天父子で回すNゲージ  
屋根越える百円ショップのシャボン玉

◎壮大な想像力である。あり得ない見えない光景を思ひ描く。脳も喜んで働いてくれるだらう。地球の美しさにブラックホールも驚いた事だらう。

◎「Nゲージ」は鉄道模型の規格。線路の幅が9ミリ幅。子供のおもちゃではない。本物そっくりに縮尺された車輛を手元のコントローラで思ふやうに疾駆させる。鉄道模型に父と子とどちらが先に好きになったのだらう。父子の楽しいひとときに季語は硬い。

◎百円ショップの品ぞろへには驚くことがある。だが、「百円ショップのシャボン玉」は詩趣がそがれる。百円ショップの句を数句参考までに、



養花天百円眼鏡の軽さかな  
百円シヨップに買ひ呆けをり年の暮  
四月馬鹿百円店に老眼鏡

加藤翹英 京鹿子  
北村香朗 京鹿子  
八牧美喜子 濱

定梶しよう  
ひそかなる土筆の決起夜明けかな  
さざえ生き海の深さの殻の色  
路地あたたかき白墨の石蹴り図

◎「ひそかなる」「決起」と云はれると何ごとかと思ふが、素直に土筆のありやうを書いた作品。竹の子のことも土筆のことも知らないが、土筆も夜陰に乗じて伸びてくるのだらうか。夜明けを待つて土筆の一揆である。土筆のことに留めて愉しませていただいた。

◎眼前に在る栄螺。殻の色、形態を見てみたら栄螺が生きてきた時間、生きてみた海の深さを体験したやうな思ひになられたのだらう。

◎土の路地でなく舗装された路地。土の路地なら枝切れで土を引っ掻いて図を作っ

た。行きずりに見付けた遊びの跡。人の気配のないのを確かめて図の中に足を入れたかも知れない。寒い日でも暑い日でも「路地あたたかき」である。

秋川 泉

遠富士に親子も犬も立ち止まり  
花の雲富士の霊峰野の果に  
春がすみ屋台のにほひ誘はるる

◎感動した時は心置き無く「遠富士や」としてもよい。犬と一緒に立ちどまるところが味噌。しかし、この句無季といふ内容ではない。「初富士や」では。

◎同じ場にゐたのでこの気分よくわかる。わかるが対象に負けて絵葉書めいてしまった。しかし作者にとってこの句を読み返す度にその時その場の様子があの人の言動が蘇る。タイムカプセルである。俳句にはこのやうな効用もある。作らなければ始まらぬ。

◎少々俗に傾いた。「誘はるる」とまで言なければ「春かすみ」の顔も立つかもしれぬ。

慣れしスーパー閉店の春いと難儀

杉の子の目覚めの辺り目借時

春埃櫛より効果の髪ブラシ

◎「難儀」といふ俳語になりにくい語を使ひこなしてゐる。前にも「難儀」の句がある。今回のいと難儀の「いと」といふ古語が場違いなところで使ひ込まれてゐる。「慣れし」は省き「スーパーの閉店の春いと難儀」では。

立冬や縫糸とほす難儀かな

障害に難儀と暮らし蜷汗

参道の坂は難儀の彼岸かな

全て桂子さんの句。一昨年お会ひしたとき、わたしより遙かにお元気であられた。「難儀」を逆手に取り作句を愉しまれてゐる。

◎耳に馴染んだ「杉の子」が辞書にない。子供のころ歌つてゐた歌に杉の子が出てくるなど調べた。「お山の杉の子」吉田テフ作詞。「これこれ杉の子起きなさい」とお日さまが声を掛ける。「あを」の人で知らぬ人はゐないとおもふ。(ひとりかふたり知りませ〜んと云ふ人がゐたらいいなあ)。高島茂が「蛙の目借時」を目の

敵にしてゐたのを懐かしく思ひ出した。その時はわたしも同調してゐたが、近頃は使つてみたいなど思ふやうになった。掲句の「目覚めの辺り」が戦後すぐと現在と錯綜して不思議な感じになる。はじめは目覚めに目借時はと首を傾げたが何回も読む内これもありかと思へた。六番までであるこの歌の最後は「さあさあ負けるな 杉の木に／勇士の遺児ならなお強い／体を鍛え頑張つて頑張つて／今に立派な兵隊さん／忠義孝行ひとすじに／お日様出る国神の国／この日本を守りましょう 守りましょう」。これを戦後サトウハチローが補作して作り替えた。「さあさ負けるな杉の木に／すすく伸びろよみな伸びろ／スポーツ忘れず頑張つて頑張つて／すべてに立派な人となり／正しい生活ひとすじに／明るい楽しいこのお国／わが日本を作りますよう作りましょう」

「杉の子」の一語はなかなか重い。

◎身辺に句材を求めて句作りをされてゐる作者ならではの目線。「春埃」が中七以後に繋がりすぎもつたない。「霾天」などいかがでせうか。

篠田 純子

路上生活者死んでゐるのか春眠か  
ドッグランを繕れゆく老犬春の草  
若楓めでつつきつねうどん食ぶ

◎路上生活者を氣遣つての作品と思ふ。が、「死んでゐるのか」は一考あつて欲しい。  
◎鎖を解かれ喜び勇んで走り回る犬。その中を老犬が繕れつつ、それでも老犬なりに走つてゐる。「春の草」で老犬を温かく見守る作者がゐる。

◎きつねうどんは「食ぶ」だらうか、「食ふ」だらうか考へた。純子さんなら食ぶ、わたしなら食ふ。食べ物の違ひでなく食べる人の違ひだと納得した。輝くやうな若楓を見ながらの庶民的なきつねうどん。関西では「けつねうどん」といふらしいがこの方が旨さうに聞こえる。明るくすつきり仕上がつてゐる句。

須賀 敏子

満ち足りて桜の里を後にする  
草摘むやごごめ柔らか半日陰

元号を三度生きるや四月尽

◎「満ち足りて」ところもちをストレートに述べると作者はスッキリする。読者はさうですか、で終わつてしまふ。ここは五感の出番、写生の出処である。

◎草摘、何の草を摘んでゐるのであらう。そこに目的外のコゴミを見つけた。作者はコゴメと書いてあるが、山菜のひとつクサソテツの若芽と思ふ。うれしいとかいはずもよろこびがたはる。前句の「満ち足りて」をこのやうに：。作者はすでに分かつてゐることなのです。

◎自己の生と改元とやはり重ねて考へてしまふ。わたくし、昭和平成の時は面倒なので西暦を使って過ぎた。役所の書類は元号なので一瞬戸惑つた。天皇制云々といふやうな大袈裟なことではない。令和は私の最後の元号、西暦から代へやうと思つてゐる。キリストからの転向である。

森 なほ子

落花みな飛花となりゆく今朝の風  
桜東風ホーム短き駅に降り

春日向極楽談義聞かさるる

◎ 飛花は桜の花びらが時がきてはらはらと散るも、風に乗り飛ぶ様。飛花落葉といふ熟語がある。世の移りかはりの無常であることの喩。この句にはさのやうなおもひはない。「飛花」そのものに風を覚える。故に「今朝の風」と置くのは風が主役といふことか。

◎ 「ホーム短き」が、都会から離れた自然豊かなところの駅といふ意に使はれてゐる。「無人駅」「単線」などもそのやうな効果を期待して使はれることがある。むづかしい使ひ方である。

◎ 「日向ぼこり」は冬の季語。春でも寒い日は日向ぼっこをする。作者はそんな時にその場に居会はせた。そこで春なのだから「日向ぼこり」は使へないと「春日向」にした。これはわたしの邪推。極楽談義には春が華やかでよいかもしれぬ。「聞かされる」がいつの間にやら……………。

田中 藤穂

墓地の奥真盛りなりし白椿

葉桜やポストまでゆく髪梳かす

おぼろなり平成をはる満月は

◎ どこかでこのやうな景に出合った記憶がある。吟行で案内されて大寺に伺った時であったとおもふ。人気のない墓地の奥、隅と云つてもよい。そこに黙々と今を盛りに白い椿が咲き誇つてゐる。場所が場所だけに印象深く思はれたのである。

◎ 原稿を何回も見た。ポストまで行くのに人に髪を梳いて貰ふとは……………。フアックス投句なので「髪梳かず」の濁点が薄くて消えたのかと思ひ確認の電話をした。「梳かす」でなく「梳かす」よと云はれて納得。私事だが今まで髪に触ると云ふ習慣がなかった。妻が困つて床屋をしてくれる。出かける時は帽子のお世話になる。で済ませてゐたが、ひとり暮らしになつてから床屋にも自発的に行くし、出かける時は鏡をのぞき込む。この句の心もちがよく分かる。若い時とちがひ年を取ると一段と気を遣はなければと思ふやうになつた。「葉桜や髪を梳かしてポストまで」では。

◎ 「おぼろなり」は満月のこと。平成ではない。平成ではないのだが、過ぎてしまへば平成もおぼろに読めてくる。屈折した面白い表現。

赤座 典子

寄り添へる鄙の桜の慎ましく  
雪解田や揺蕩ふ隅のきらめきて  
谷川岳の白重ねぬる四月かな

◎寄り添へるは、鄙にかかるのか、鄙の桜にかかるのか。慎ましくを含め戸惑った。  
◎このやうな場に行きあつたことがないが、よくも自然の小さな変化を汲みとられた。雪が融けはじめた春さきの田面。その隅のあたりがたゆたひ、きらめいてゐるといふ。なにゆゑさういふ現象になるかは知らぬが見逃ししやすい景をしつかり見届けられた。春の息吹を十分に感じさせてくれた。

◎まだまだ雪の残る谷川岳。雪の山巒を「白重ね」と表したのだらうか。さうは思ったが一抹の不安がのこる表現。



前号訂正

p.26 欠印↓矢印

あをキーワード俳句辞典(はしーばす)

端

散紅葉歩道の端の居場所かな  
海坂や枯野の端に來り見ゆ

長崎 桂子  
定梶じよう

梯子

梯子坂はしごもあらず三の酉  
冬仕度わすれられたる高梯子  
酉の市運び込まれし長梯子  
明易し梯子を掛けることにする  
大根掛け少女梯子に唄ひをり  
ひぐらしや暗きに眠る箱梯子  
登らんと梯子を仰ぐけふ寒露  
春めいて梯子は楔弛みけり  
閑古鳥梯子は縁の下に仕舞ふ  
煙突に梯子がついてゐる春宵  
実梅挽ぐ力無き手が梯子持つ  
出初式航空公園梯子立つ  
マスクして検診皮膚科外科梯子  
袖に梯子ふしぎなけれど掛けてあり  
柿撓わかかりっぱなしの梯子かな  
バードウイーク預かつてゐる長梯子  
抽籤の梯子車試乗秋の天

障子開けそこは端近夜の秋

芝 尚子

端近く指藍に染め浴衣縫ふ  
端近で體をひねる錦玉羹

芝 尚子  
佐藤 喜孝

馬車

銀の馬車渡るよと見し夕月夜  
馬と馬車馱者と眠れり晝の樹下  
馬車は揺れ大日輪は黍の上  
胡麻畑パゴダへ馬車の五臺着く  
木下闇馬車屋に子馬生まれをり  
馬に虻腕にも虻馬車埃  
馬車で行く砂丘への径小判草  
古本や暖炉に揺るる馬車の旅  
桜東風帰りの馬車に乗り遅れ  
作らんか南瓜の馬車を妻のため  
蛇苳むかし馬車馬輓きにけり  
臘梅の山へ觀光馬車に乗る  
ゆつくりと馬車径あるく梅雨の苑  
花見馬車足取り軽く南部駒  
文化祭動きだしさう馬車に乗る

派出所

粉雪降る派出所の赤ランプかな

定梶じよう

場所

場所移し議論の続き秋灯下  
蒲公英がいつもの場所に黄を灯す

栢森 定男  
鎌倉喜久恵

金魚玉猫の届かぬ場所にかな  
 芒野にかくれ場所あり紋黄蝶  
 冬越しの場所を求めて黄蝶去る  
 托卵の場所やいづこに遠郭公  
 蟪蛄や昨日も今日も同じ場所  
 断崖の苔むす居場所野生菊  
 置場所を替へてみやうか日脚伸ぶ  
 巢つくりの場所定まりぬつばくらめ  
 冬に入るいつもの場所に血圧計  
 黒猫のいつも居る場所お茶の花  
 猫じゃらしいいつもの場所で招きをり  
 勤皇の寄り合ひ場所の薄暑かな  
 父親の場所取りゲーム運動会  
 年の夜のテレビは吾の居場所なく  
 散紅葉歩道の端の居場所かな  
 生きる場所突如替へられ水仙花

芭蕉  
 後藤 志づ  
 河合 笑子  
 堀内 一郎  
 堀内 一郎  
 堀内 一郎  
 堀内 一郎  
 田中 藤穂

梅の実の三つ四つまるぶ芭蕉句碑  
 連れ立ちて女芭蕉や柘榴裂け  
 爽やかに芭蕉の国をよぎる風  
 芭蕉翁浴みし鮮湖湯十一月  
 芭蕉庵都忘れのありてこそ  
 大蟻小蟻芭蕉庵にすみて老ゆ  
 ひぐらしや芭蕉と杜国手をつなぐ  
 まゆみの実芭蕉の姿若くあり  
 春の夕芭蕉の聴きし水の音  
 林咲けり芭蕉と曾良の山寺に  
 片陰を伝ひて芭蕉稲荷かな  
 浸りきし芭蕉蕪村の春季展  
 若葉影唐招提寺芭蕉句碑  
 黒羽の芭蕉の句碑に冬日向  
 旅人は芭蕉でありし雲の峰  
 芭蕉忌の浪花時雨と打たれけり  
 電線にかかる三日月芭蕉の忌  
 雪の峰旧軽井沢に芭蕉の碑

柱  
 新涼や一夜泊りの太柱  
 柱なき家ぬちくまなき稲光  
 穀象や鼻つ柱を折つてみるか  
 部屋毎の柱に凭る猫の恋

森山のりこ  
 堀内 一郎  
 長崎 桂子  
 須賀 敏子  
 堀内 一郎  
 佐藤 恭子  
 篠田 純子  
 篠田 純子  
 石森 理和  
 須賀 敏子  
 須賀 敏子  
 赤座 典子  
 須賀 敏子  
 須賀 敏子  
 堀内 一郎  
 井上 石動  
 森 なほ子  
 須賀 敏子  
 渡邊 友七  
 竹内 弘子  
 佐藤 恭子  
 赤座 典子

その上の人柱こそ曼珠沙華  
 きさらぎや背に一本の柱負ふ  
 竹筒の風船かづら床柱  
 独り居の柱かぼそきひぐらしも  
 夫の白地わたくしが着て床柱  
 十五夜のふけゆく電信柱かな  
 たばこ屋の柱曆に猪の子とぶ  
 拭きても汗一茶の柱にわが指紋  
 真ん中に背を搔く柱冬籠  
 茶柱が傾きかけてゐる長閑  
 囀や家の柱はみな四角  
 秋風の吹き抜けてゆく身柱元  
 蠅叩柱に下げて古りにけり  
 電信柱犬が嗅ぎゆき雲の峰  
 年を越す柱時計も拭き清む  
 幾万の人柱立つ涅槃西風  
 茶柱や障子に立木の影移る  
 積乱雲崩れのこりし雨柱  
 手斧目の黒き柱に遅日かな  
 躓きて空気の柱輝の手で  
 山神へ願ふ木遣ぞおん柱  
 柱なく背丈刻めぬ節句かな  
 御柱疵誇らし気立ち姿

堀内 一郎  
 堀内 一郎  
 芝 尚子  
 渡邊 友七  
 芝 尚子  
 定梶 じょう  
 竹内 弘子  
 渡邊 友七  
 堀内 一郎  
 堀内 一郎  
 芝 尚子  
 佐藤 喜孝  
 篠田 純子  
 芝 尚子  
 定梶 じょう  
 田中 藤穂  
 篠田 純子  
 石森 理和  
 大日向 幸江  
 赤座 典子  
 佐藤 恭子  
 井上 石動  
 七郎 衛門 吉保  
 七郎 衛門 吉保

柱のない家を貫く稲光  
 消火器のしよへるは柱受難節  
 走り根  
 オブジェめく走り根見つけ秋うらら  
 走り根のまた土に入る白露の日  
 走り根を跨ぎ森林浴うらら  
 走り根を浮き立たせをり花の屑  
 走り根を隠すおかめ羊歯の蔓延  
 走り根にまた躓いて藪蚊かな  
 土牢を守る走り根花すみれ  
 走り根のぬめりと光り春を待つ

斜  
 肥後の守汗の親指斜交ひに

バス  
 短日の病院行きのバスの混む  
 水上バス左右の土手より落花飛花  
 カレー匂ふバス終点の残暑かな  
 秋日和バス待つ人に鳩ならぶ  
 花野ゆくバス終着は恐山  
 闇走るバスすいてをり藜匂ふ  
 コンドームの宣伝のバス青葉風  
 小鳥屋をバスが過ぎゆく時雨雲  
 春光に淡き雀斑水上バス

竹内 弘子  
 定梶 じょう  
 篠田 純子  
 佐藤 喜孝  
 篠田 純子  
 篠田 純子  
 佐藤 恭子  
 篠田 純子  
 篠田 純子  
 篠田 純子  
 佐藤 恭子  
 篠田 純子  
 篠田 純子  
 田中 藤穂  
 篠田 純子  
 後藤 志づ  
 赤座 典子  
 鎌倉 喜久恵  
 赤座 典子  
 篠田 純子  
 田中 藤穂  
 赤座 典子

## あとがき

### 表紙の写真

表紙の写真は一年前の当月に撮ったのを使つてきたが、不可能になつてしまった。今月は二〇一五年の神宮球場で近づいた雀を何の気もなくシャツターを押したものの。今見ると足元に落ちてゐる焼きそばの欠片がお目当てのやう。そんな雀が愛しくなってきた。写真も俳句も撮つて作つてなんぼ。作らなければ始まらない。宝籤は買はなければ当たらないやうに。

あの球場の石段が苦手になり、その後神宮には行つてない。

### 「前月抄」のカット

今月は孫と孫の母親。両者共に九歳。仲人のおばあさんがいたく孫をかわいがつてくれた。そのおばあさんへの年賀状。何故手元にあるかと云ふと、そ

のおばあさんが後年返してくれたので……。エイマは近頃人の顔しか描いてない。それも実在の人ではない。きっと、自分の理想の姿を描いてゐるのかも知れない。絵に没頭してゐる時間が楽しいらしい。会員のお身内の方で児童画のデータよろしければ使はせて下さい。お待ちしてゐます。(喜孝)

二〇一九年六月号

発行日 六月十七日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

竹僊房  
佐藤滋子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)